

湖南時務學堂初集

湖南時務學堂第一集

答問

李炳賢問 共六條

言公法則外中國謂未預讓國富強則趨中國以為利

藪孔孟之門人將於此趨口不談天下事乎抑棄其仁

義之名相率而言利乎

教習梁批

孟子之利乃自私自利解法故曰何以利吾國利吾家利吾身各為其利而相軋則害莫大於是矣此理極易明彼孟子當時所謂各國者如今日之一省耳今若有湖南人於此曰

國版第一

古者指文王而言周公制禮在成康時孔子改制懼無徵不信舊說以為文武之政此說然否

教習梁批

南海先生新學僞經攷發明六經皆孔子所作其說最詳孔子作春秋託王於魯公羊傳謂王是文王論語亦言文王既沒斯文在茲然則孔子之法文王明矣三統之說本諸董子何休取繁露三代改制質文篇讀之與公羊傳何注所發明者比較便悉

黃瑞麒問 共二條

許行並畔之說意以君與民宜同勞者今西國君主納

得此意而孟子當日必距許行其意何也

教習梁批

許行亦講平等特無條理以一人之身而百工之所為備故

關之

教習梁批

大彼得偶一行之俄遂大強此等事若能者行之固極佳然思以易天下則不可耳墨子之道亦然莊生所謂墨子雖能獨任奈天下何此孟子所以必關之也

齊師滅紀春秋嘉其復讎傳曰雖百世可復其讎也此意毋乃與敵惠敵怨不在後嗣之言有相左乎

(國版の解説は一五〇頁に掲載)

禮が、荀子の梁論によつて生まれたとする見解は、もし文獻に内在于する性質を重視するという立場に立つならば、郷飲禮禮の文體が、荀子のそれより新しいという論證がなされねば、成り立たないであろうが、事實はむしろその逆であることを思わせる。

なおまた著者は、毛鄭以來の舊説を破するに急なるあまり、それらの舊説の理解について不十分な點があること、前にもふれた通りであるのは、やはりこの書物の欠點と思われる。あえて微細な例の一つをあげれば、「興」の概念に對する歴代の解釋をあげたうち、漢の鄭玄について鄭小同の「鄭志」をあげるが、これも實は鄭玄の説であること、いうまでもない。

また舊説を破するに急なるあまり、舊説をなすだけ自己の解釋に遠ざけて見る傾きも、ないではない。たとえば「興」の修辭が氣分象徴であることを、確定したのは、著者の功績の一つである。しかし著者の方向の解釋が、舊説の中に全くなかつたかどうかは、疑問であつて、「詩解における二千數百年の蒙を拂つた」という著者の自負は、やはりすこし性急であるかも知れない。著者が著者の見解と異なるものとして列擧された從來の學者の見解の中にも、著者の見解に近く私には讀み取られるものがあるのであつて、もし著者が引かれなかつたものをあげるならば、朱子が論語の子罕篇の「唐棣の華、偏として其れ反せり」云云につき、「六義に於いて興に屬す、上の兩句は意義無し、但だ下の兩句の辭を起すのみ」といつているのを、附記し得る。

(吉川幸次郎)

湖南時務學堂初集 (圖版第一)

光緒二十四年(一八九八)長沙で出版。内容は學約、界説、答問の三部からなる。學約は時務學堂の學約、界説は讀孟子界説・讀春秋界説を指し、何れも梁啓超の執筆にかかる。答問は時務學堂の學生の質問とそれに對する總教習梁啓超、分教習韓文舉、葉覺邁の應答である。學約、界説は飲冰室文集にも取められ、答問は翼教叢編、覺迷要録に抄録されている。しかしそれは抄録であつて、この書によつて始めて知られるものが甚だ多い。ことに學生の誰がどのような質問をしたかは、この書だけでしか判らない。珍重すべき一文獻である。

譯書彙編第一期 (圖版第二)

明治三十三年(一九〇〇)十二月六日東京で發行。譯書彙編は江蘇出身の留日學生が中心となつて發行した雜誌であつて「留學界雜誌の元祖」といわれるものである。この雜誌は廣く政治一般を對象として、歐米並に日本の著述の翻譯と紹介を目的としている。日清戦争後には、洋務的ないわゆる西學よりも、變法的ないわゆる西政に對する關心が高まつてくるが、この雜誌によつて一應の實を結んだということも出来る。啓蒙的な雜誌であるけれども、そこに譚駁されたルソーの民約論・モンテスキューの法の精神は、變革思想を鼓吹する上に重要な役割を果している。これはその創刊號の表紙と目次である。